

自己改革が各JAで推し進められているが、今一つピンとこない、というのが正直なところだ。かれこれ20年近くたつが、初めてイタリアの農協を訪問した時のこと。北部にあるピエモンテ州の農協で組合長以下、幹部がいろいろと意見交換をしたくて待ち受けてい

まよひつゝ 歩き

るといふことであつたが、出掛けてみると待っていたのは3人だけ。役員の多くは急に用事でもできて欠席したのか、と思っていたが、話をしてみると組合員数は50人弱。要するにこの組合の幹部は3人なんだ、と納得。

次に南に飛んでシチリアの農協を訪問したが、

農的社会デザイン研究所代表・蔦谷栄一氏

イタリアと日本の農協

当事者意識で活動を

やりとりするうちに日本の農協の話になり、日本の1JA当たりの組合員数が1万人を超え、県域を対象とする農協も増えていることを話した。ところが反応がないというところが絶句している。彼らが考える農協の規模は50人が限界で、人数が増加すれば細胞が分裂するように農協も分かれるという。要するに、日本のような規模にまで膨れ上がった農協そのものが理解できないというのである。

農協の合併、大型化をいまさら否定しても意味はなからう。肝心なことは、大きな組合の中に、組合員が主役となり当事者意識を持って活動できる場を、いかにつくっていくか、増やしていくか、ということである。

イタリアにも大きな農協はあるが、小さな農協であるからこそ農協だ、という感覚がまだ濃厚にあるようだ。お国柄や歴史等、さらには総合農協と専門農協の違いもあって規模の大小について論じることにはさほどの意味はなからう。しかしながら、組合員が当事者意識を持ってこそ協同組合、農協だという感覚は極め

て大事であり、ここにこそ協同組合の本質があるというところも確かである。協同組合の主役はあくまで組合員であるのが基本であって、サービスを受けるのが組合員だとする日本の協同組合の現状に痛烈な問題提起を行っているように受けとめることもできる。

農協の合併、大型化をいまさら否定しても意味はなからう。肝心なことは、大きな組合の中に、組合員が主役となり当事者意識を持って活動できる場を、いかにつくっていくか、増やしていくか、ということである。ともすれば事業の見直しを中心にJA改革に取り組まれていく印象があるが、これは二次的な問題であり、組合員が当事者意識を持って農協活動に参画していく場づくりこそが基本的に求められていることであるように考

える。(次回は15日付)